

# 「装飾」の美術文明史

鶴岡真弓著

ポーランドで落ち合った鶴岡真弓は妙に着膨れしていた。ウズベキスタン調査のため一ドル紙幣で身体をびっしりと包んでいたのだ。とっさに連想したのが小泉八雲の「耳なし芳一」。身体に字を刻み、御札で体表を覆い尽くす祓除(ばつじよ)の魔術が、「飾」の起源をなす。

装飾文様に思考の権利を授けるうえで、著者は大きく貢献してきた。ユーラシア大陸西端のケルトと極東の島国日本。本書はその両者をサマルカンドの地に交差させる。地球大の広がりを獲得した東西の往還。それはまた著者に、宇宙と身体との交響をも体験させる。天空の星座は宇宙の奏でる天の文(あや)。そのコスモスの装いに呼応する人間の営みこそ、化粧(コスメティック)の

語源ではなかったか。

天文と人文との交信が描く文様の綾。それゆえ装飾には理性を不安にさせる魔性が潜む。秩序の崩壊を誘う無限軌道の想像力が、文様の磁場には充満しているから。

物の輪郭とは物体の内部にはなく、外部に触れた表層の描く軌跡だとレオナルド・ダヴィンチは語る。物と精神の臨界にはおのずと綾が生まれると、中国古代の文論「文心雕龍」は説く。構造主義言語学の始祖ソシュールの波の比喩(ひゆ)が想起される。ヒトの言語もまた、宇宙と精神の臨界に立つさざ波の織り成す模様なのだから。

## 暗示による可能性の芽はぐくむ

もはや、装飾の根源性は明らかだろう。近代西欧の合理精神の秩序志向によって、文明の未開状態の証拠、知的営みの副次的な寄生物との烙印(らくいん)を押され、従属的な場所追いやられていた装飾。だがここには自然に畏怖(いそ)する人間の、起源の情念が露呈し、知性万能主義の価値観の限界を補充する。

自然という素材に逆らわず、その肌合いとの交歓に作品構想の靈感を求めるウィリアム・モリス。完成ではなく生成の歩みを「愛の労働」と慈しむこの芸術家の「柳の枝の壁紙」に著者は「深く呼吸する自然」の息吹を感じる。「決定でなく暗示」によって可能性の芽を伸ばす装飾。著者はその発芽細胞を読者に植え付けてはぐくむ巫女(みこ)と化す。(稲賀



繁美・国際日本文化研究センター教授)(NHK出版・三三〇円)